

(様式4)

平成27年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立塙山小学校 教諭 武藤 雅子

- 1 派遣期日 平成27年11月13日(金)
2 研修先 学校名 東京学芸大学附属世田谷小学校
所在地 東京都世田谷区深沢4-10-1
<http://www.setagaya-es.u-gakugei.ac.jp>

3 研修内容

テーマ 自分の学びに「自信」がもてる子どもを育む学校の創造
一学び続ける共同体をつくる授業デザイナー
(1) 公開授業 第3学年 永山 香織先生 「算数」 はしたを表す数
(2) 協議会

(1) 算数科における子どもの実態～「自信」に焦点を当てて～

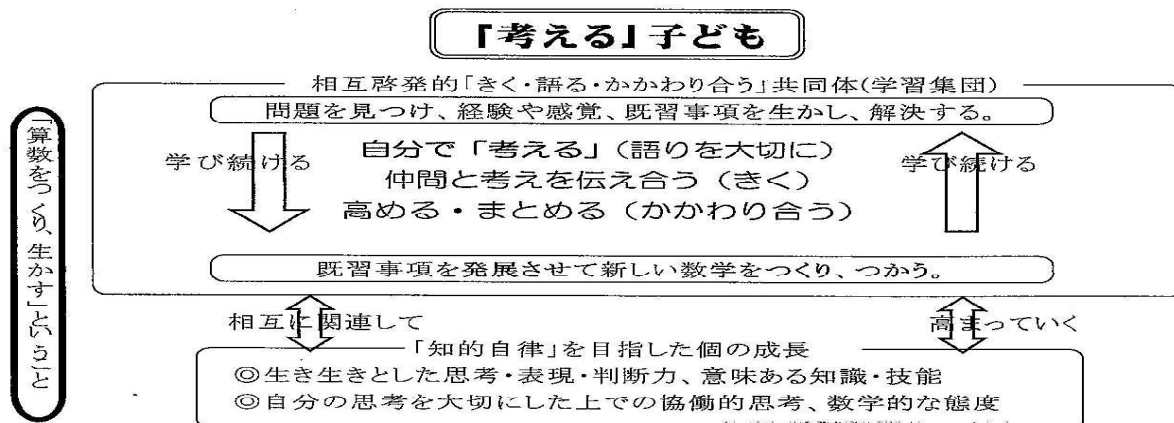
【自分の学びに「自信」がもてている子ども】

- ◎問題を見いだし、意欲的に取り組む子
- ◎自分の考えに、確かな根拠をもてる子
- ◎自分の間違いを受け止め、問いを表出し、仲間とのかかわりの中で学ぼうとする子
- ◎今まで自分がしてきたことをもとに、次にこうしようと思える子

【自分の学びに「自信」がもてていない姿】

- ▲人に言われるとすぐに自分の考えをやめる
- ▲人任せな「できる」「知ってる」「分かっている」
- ▲何かに、誰かに正解や結果をもとめようときく
- ▲相手の言っていることを聞き流し、正解ばかりに目を向ける

(2) 算数科で目指す子ども像～自分の学びに「自信」がもてる子どもとは～



算数科において「自信」をもって学ぶ子どもとは、「考える」子どもである。「考える」子どもは、これまでの経験を生かして新たな問題を見いだし、立ち向かっていける子どもである。仲間とともに「考える」子どもたちは、その問題を自分の問題としてとらえ、新しい算数をつくり出しながらともに乗り越えようとするはずである。新しいものをつくり出す過程を楽しめるはずである。

しかし、実際の算数授業の中では、「考えない」姿が散見される。「考えない」理由として、昨今の子どもの生活環境の変化、思考力・表現力・判断力を育てるための問題解決型の授業が単に、学習の過程を踏むだけの流し方に留まり、本質を失っている場合、知っている知識を伝えるだけの「学び合い」に陥っている場合などが考えられる。

数学教育の父、和田義信先生の言葉から考えると、「考える」子どもとは、単に「できた・できなかった」ということよりも、自分事として悩み、それに対してどう自分が立ち振る舞い、次の段階へ進んでいくかということ大切にしている子どもである。

(3) 学び続ける共同体をつくる授業デザイン～「自信」を育むために～

(ア) 考える場をつくる

- ①ある問題が既習の方法によって解決され、別の方法でも同じ結論になる場
→解決過程などについて価値判断、洗練されたものに練り上げること
(多様な問題解決方法と比較検討の場)
- ②ある問題が既習の方法で解決できない場
→問題解決(問い、悩み、葛藤、困り感などから)
- ③これまで出会ったことのない未知の場
→場を分析するところから
- ④考えたことを考える場(考え続けていく場)
→自分の考え(解決方法)をふり返って考える(学習感想)

(イ) 仲間とともに「考える」

考える場をつくっただけでは、個が「考える」としてもその考えが高まっていくことは難しい。仲間とともに「考える」ことで、個の考えも高まるのである。それぞれが互いに「考える」仲間であれば、「考える」ことの苦労を知っているであるから、相手の考えをすぐ否定したりすぐに真似しようと飛びついたりしないはずである。相手の考えを聞き、着想の根拠について交流しながら考えを比較・検討し、自分の考えを洗練・高めあっていくことができる。そして、次の段階へ進むときには、個が自分の考えを振り返り、再び「考える」のである。つまり、個の成長は相互啓発的学習観に支えられているととらえられるのである。

(ウ) 数学的な視点から個の考えを見とり、実感を伴った理解を支える。

教師は、数学的な視点から多様で自由な子どもたちの個の考えを見とっていき、仲間との考えの交流を支える必要がある。そして、その交流を経てどのように個の考えが変わっていくのか、あるいは変わらないのかということとともに、その子が「考える」よりどころとしている数学的な根拠を見つめ、系統的に丁寧に導き、実感を伴って理解できるように支えていくことが大切である。

(4) 公開授業 第3学年 永山 香織先生 「算数」 はしたを表す数
本実践の主張

第2学年で「簡単な分数」の学習をしている。また、整数の加減乗除や第3学年での「大きな数」の学習を通して、十進位取り記数法のよさも実感している。

このような学習経験がある子どもたちには、はしたの数を表す方法として、これまで通り、基準量を10等分して小さな単位をつくるというアイデアと、 n 等分して小さな単位をつくるというアイデアが並列する。どちらの考えも生かし、具体的な操作を通して小数と分数の関係を探求させることで、これまでの十進位取り法を生かせるという小数の表現のよさや、十進法では表せない大きさも表せるという分数の表現のよさを実感させたい。

4 感想

自分の学びに「自信」がもてる子どもを育む学校の創造をテーマに、第3学年「はしたを表す数」を参観させていただいた。前時の子どもたちの疑問から課題を見だし、授業を展開していったおり、教師と子どもの対話型で進められていた。子どもたちが課題に向けての考えをいろいろ発表しており、疑問や分からないことまで、しっかりと話せていたのが印象的であった。おそらく、これまでの学習の中で「できた・できない」だけでなく、考えることの大切さを、子どもたち自身に気づかせてきた結果なのだろうと感じた。

子どもたちが「考える」ようになるために、個々の考えや言葉を大切にするとともに、考える場の設定を行うこと、そして何よりも教師自身が教材研究をし、子どもたちに投げかける言葉を精選していかなければならないということを改めて実感した。子どもたちが「自信」をもって学べる、「考える」子どもになることで、算数という教科に留まらず、大きな成果が表れてくると考える。日々の教育の中で、子どもたちに「考える」ことの大切さと「考える」ことの楽しさを実感できるような授業を展開できるよう研修を深めていきたい。